

はじめに

—— 清水 裕先生のこと ——

宮 崎 郁 司

清水裕先生が定年退職され、招へいされて社会福祉大学の特任教授とられた。戦中、戦後の険しい道を一緒に歩いてきた同僚がまた一人去られることは寂しい限りだが、先生には新たなそして有意義な首途になることを考えて心からお祝を申しあげたいと思う。

先生は丹後の久美浜町をあとにお兄さんと一緒に京都市に出てこられ、同志社中学を経て同志社大学予科に入学し、昭和14年に同大学文学部英文学科を卒業され、京都府立福知山高等女学校の教諭になられ戦中戦後を一貫して公立の旧制中学校、新制高等学校で教鞭をおとりになった。戦後、先生と英文科同期生のよしみを再開した頃、先生は市内の山城高校、鴨沂高校などにご在勤であったが府立桃山高等学校を最後に22年の長きにわたる職を勇退され、その豊かなご経験と高まいな識見の故に同志社大学英語専任者会議の推薦をうけ、商学部専任講師として着任されることになった。今春、お別れの話をしているとき、先生はあれから17年経った、と感慨深げにぼつりと漏された言葉の調子は今もって忘れることができない。その間英語科目主任に選ばれて英語専任者会議々長を勤めてもらったし、商学部学生主任をされたこともあった。

先生の研究活動についてはあとで触れるとして、京都府教職員組合高等学校の部、これは後に高教組となるが、その委員長をしておられたことがある。鴨川の川端通り丸太町上るに木造二階建の古風な御殿造りの京都府教育会館という建物があった。私が此所で催されたある会合に出席したとき、教職組の委員長の重責を荷なって奪闘しておられる先生の姿に接したことがあった。

当時は薄給、物価高、やみ市で国民生活は破壊され、朝鮮戦争、日米安保締結反対などで明日への希望をどうやって継いでいくのかさえ分からない情勢下にあった。組織力あるものはデモを組み、ハンストをぶって、識者と労働者は何とかして国民を戦争の荒廃から守ろうとして、ある不可解な力に抵抗をしていた。教職組の委員長として陣頭に立っている先生の姿をそこに見たとき、そこには宗教的信念に燃えた予言者のような先生を見る気がした。もっともこんな気がしたのは同じ同志社中学を卒業した者の偏見なのかも知れない。

先生は日本英文学会、世界文学会、日本アメリカ文学会、日本時事英語学会の会員として精勤に活躍してこられたことは人も知るところである。先生の紀要論文や学会発表と著書についてみると先生の御活躍の中心はアメリカの小説の分野に限られている。そのうち、『人文学』№77、1964年に見られる「ヘミングウェイと戦争」は本学の機関誌に発表された最初の論文である。ついで「O. Henry の発想と表現—ユーモアを中心に—」は『人文学』№85、「Caldwell における Sex について—God's Little Acre を中心に—」は『人文学』№118に見えている。この他に『主流』№27、『同志社商学20周年記念号』、『英語英文学研究』№1と№3、『世界文学』№43(東京)に論文1点ずつを数えることができる。しかし何ととってもタフな先生の発表意欲は著書、『現代アメリカ文学と社会』(ミネルヴァ書房昭和50年)に結晶として現われた観がある。これについては立命館大学文学部英文学科の永原誠教授が雑誌『世界文学』の書評欄で高く評価しておられるので、省略するとして、ここで先生のアメリカ文学観—ここではサリンジャー論考となるが—に関する論争の中心点を紹介しておきたい。

先生はサリンジャーの『フラニー』論で次のように述べられる。「『フラニー』だけではないが、サリンジャーの作品が一般に今日の生きる暮しに直面する労働者よりもインテリ学生に愛読される。(中略)将来にわたる本ものを語るのではなく、あくまで現在における迷路の中で交錯した心理の綾どりを写

すに止まる故、一時的なブームを呼ぶことはあっても永続的な文学的生命を残すかどうかは明らかでない」と。ここに労働者の立場から終始発言しておられる先生の態度が明らかにされているようである。即ちその立場は人間と社会との物質的な関係を克服して、人間が温かく通う血で結ばれる環境の創造を作者の思想の中に探求する立場である。それに対して京都大学の安藤昭一教授は『ライ麦畑でつかまえて』—この作品は『フラニー』、『ズーイ』と共に三部作をなす—の機能的側面に触れて、Warren Frenchの「今日の若者を知るためにも、われわれはサリンジャーのこの作品を読まねばならない」に同意見であると言う。そしてこの作品が出版後十年間に150万部売れ、その後も毎年25万部売れていることの理由の一つに、「この作品に、疎外に悩む現代の若者の気持や立場が彼らの言葉で（あるいは彼らの欲する言葉で）見事に代弁されているからであろう」と主張される。言うまでもなく同教授はサリンジャーの魅力の大部分は作品の構造を構成する現代のアメリカの若者の言葉にある点を力説されるのである。この論争は作品と読者との同体験を尊重される先生と言葉という表現形式を批評の対象とする安藤教授との対立からくるものである。ところが言葉からは経験は生れるものでないからこの対立意見は単に次元の相違を意味するにすぎない。したがって究極的には「今日の悩みと孤独点から逃れようとする感情的要求から発する抽象的な思想の出口として神とか仏陀への祈りに安らぎを求めようとしたのである」とサリンジャーの逃避傾向を指摘される先生と、『キャッチャー』には、一つの重大な欠陥がある。それは、作者の側における社会科学的認識の完全な欠除に由来する作品の限界である。」と作品の構造上の矛盾を追求する安藤教授とはここに意見の一致を見ることとなる。（『世界文学』№643；№644参照）

先生の今後の御活躍を期して筆をおく。奥さんも、経済学部大学院に在学中のお嬢さんもお元気だとうけたまわっている。御家庭のよき協力のもとに先生が教育ならびに研究の業績を引きつづきあげられんことを祈る。

昭和53年4月